

若者たちが続々と救われる 教会を配達する「デリチャ」

わき駅での路傍伝道「デリチャ」。真ん中が山本昇平さん



福島県いわき市に住む山本昇平さん（平キリスト福音教会会員）は、いわき市全体に福音を満たそうと、路傍伝道や訪問伝道によって人々に福音を語り続けている。また、携帯サイトなどのデジタルツールも有効に用いる。この一人の信徒に伝道の志が与えられたことで、既に200〜300人の若者たちが教会を訪れた。一体、何が彼らの心を捕らえているのだろうか。

ただ友達になる

2006年4月、ウェブデザイナーの山本さん（37）はJRいわき駅前で「挨拶伝道」を始めた。ドーナツ店の前に立ち、手作りの十字架を抱えて道行く人に「こんにちは」、「神様はあなたを愛してるよ」と声を掛ける。モットーは「スタイリッシュで分かりやすく、押し付けがましくなく、ただ友達になる」。興味を持ってくれる若者には、そこに立っている理由を説明し、神の愛を語り始める。

最初は試練もあった。夏に近くの砂浜で十字架を担いで伝道していた時、5、6人のチンピラにからまれたのだ。そして、彼らのジェットスキーの後ろに繫いだ浮き輪に乗せられ、どれだけその語っている神の愛があるかどうかを試してやると、海の上を引き回された。この試練を通して、神への信頼と絆はさらに強まった。

しかし、この「挨拶伝道」という単純なスタイルの伝道は、意外にも大きな反響を呼んだ。彼れが若者たちの間で話題となり、女子高生など、少しずつ人が集まってくるようになった。

ある日、その後の伝道が大きく進展する事件が起こった。集まった人々

の中に街で嫌われている若者がいて、彼と一人のチンピラが目の前で喧嘩をし始めたのだ。そして彼が連れて行かれそうになったところで、山本さんが「彼は僕の友達だ」と割って入った。するとそこに警察官が来て事情聴取。警察署で、「あなたたちは事件にならないと動かない。だから僕は、その前に、彼らがそうならぬように関わっているんです」と語った。この一件以来、「ヤンキー」と言われる若者たちがたくさん集まるようになった。

様々な問題を抱える若者たちに偏見を持たずに関わり、関わった以上は友達だと考え、問題が起こる度に解決の道を共に探る。伝道した若者に遊ばれたと訴える女性が大変な剣幕で詰め寄ってきたときには、彼の代わりに謝ってあげた。

また、チンピラをしていた2人の若者が犯罪を犯し、その後、鑑別所や少年院に送られることになった。山本さんは、被害者に土下座しに行ったり、留置所に面会に行っては神の愛を伝えた。その後2人は、罪を悔い改め、ヤクザをやめて信仰告白に導かれた。ある時は、目を痛めた空手家のために路上で祈った。すると

彼は癒され、イエスを信じた。

「僕が関わったヤクザの一人は、未成年で前科八犯だったので、彼は、学校の先生が偏見の目でオレを見た、だったらそうやってやるよ、と思ってグレていったと言います。だから僕の役割は、父なる神様の眼差しで彼らの心を見つめ、神が彼らに対して見ているデザインの完成を見てあげることだと思いました」



様々なジャンル(?)の若者たち

こうした伝道をやり続けた結果、ヤンキー、女子高生、キャバ嬢、チンピラなど200〜300人が教会に足を運んだ。その頃、通っている教会で、交わりを目的とする食事会も始まっていた。彼らは、最初は積

極的ではなかったが、だんだんと教会の交わりに馴染んでいき、信仰告白をする人も起こされてきた。

路傍伝道の回数は次第に増えて行った。週1回から週2回に、3ヵ月間、日曜日以外は毎日路傍伝道をした時期もあった。雨の日も雪の日も駅前に立った。関わりの中で祈りに導いた人の数は数え切れない。日々、福音の種は蒔かれていった。

教会を「配達」

しかし、彼らのフォローのために用いられてきた教会の食事会が終了することになった。そこで、自分の賜物を用いて「携帯サイト」を作成することにした。実際、彼らを教会に連れてくることの難しさを幾度も体験していて、逆にこちらから教会を運べばいいと示されたのだ。

そこで、「デリチャ」(デリバリーチャーチ=配達教会の略)と名付けた伝道をするようになった。名刺サイズのトラクトを作り、教会の高校生にキャラクターのデザインを任せ、ゴスペルや福音メッセージ、教会の住所を載せた携帯サイト(<http://deli-cha.com/miicg/>)にアクセスできるQRコードも付けた。近日中に、



ウェブデザイナーとして働く山本さん

既にあるYoutube動画に加え、着うた、着ボイス、着メッセージも実装する予定だ。もちろん、ブログ「ストリートメッセージャー」(<http://st-creation.com/blog/>)やミクシィも用いている。これまでのアナログ的な路傍伝道に加え、一人でも多くの若者にアプローチできるようなうようになったのだ。

未信者を教会に連れて来るためには様々な障害がある。しかし駅前でも目の前を通行する700人には福音を語ることができる。デジタルツールを用いれば、福音はさらに拡がる。「神のことは必要としている人は、教会の外にこそ大勢います。イエス様も、待ってるのではなく、自ら外

アナログとデジタルの両方を使って伝道

に出て行かれました。まさに壁のない教会。これこそ実践したいと思っただのです」と山本さん。

路傍伝道には、仲間たちも入れ替わり立ち替わり協力してくれるようになった。念願だったギターも覚え、アンプを使ってメッセージと賛美をすることも可能に。そして、CD-Rに路傍伝道の1時間の内容を焼いて配るようになった。

その後、いわき市の総福音化を目指し、駅前では出会えない人々への伝道も開始。市の外れにある家々に「田舎伝道」と名付けた訪問伝道をするようになった。決まったマニュアルは作らず、出会った人に対して自然に湧いてくる言葉で福音を語っている。

多くの悲しみと罪

しかし、なぜ彼はこんなにも伝道に燃えているのだろう。その人生には何があったのか。

山本さんは、4歳の時に両親が離婚し、父方の祖母に引き取られた。母親から無理矢理引き離された悲しみ。訳も分からず大声で泣き続けた。

小学4年生の頃、友達に両親の離婚を打ち明けたところ、それを言いふらされてイジメが始まった。よってたかって羽交い締めになされ、女子全員の前でズボンを下ろされた。中

教会に来てくれた若者たち



学でもイジメはエスカレートし、トイレでポコポコにされたこともある。高校3年生の時、田舎の暗い夜道を歩きながら激しい怒りが湧き上がってきた。「どうして俺ばかり、こんな人生を送らなきゃならないんだ!! どうしてなんだ!」。神とかい

の息子だった。そして、聖餐式のパンとぶどうジュースが飲みたくて、洗礼を受けた。神を実感したのはその後しばらくしてから。車から美しく輝く夕日を見ているときに、「本当に神様はいる」と感じた。それから教会に入り浸りとなり、人一倍、聖書も読んだ。大学ではクリスチャンサークルのリーダーを務め、伝道もたくさんした。しかし、

路傍伝道をしているクリスチャンを見ては、「あんなイタイ人生にはなりたくない」と思った。そして、「神様なんて本当はいないんだ」と自分に言い聞かせるようになった。その後、次々と女の子と付き合うようになり、性的快楽におぼれる日々が始まった。相棒と二人で、渋谷のセンター街などで女の子をナンパし、体の関係だけを追い求めた。しかし、それはきつちりと自分に返ってきた。体の満足と引き替えに、心には癒しがたい傷が残った。

そんな真面目で熱心な仮面の下には、拭い切れない被害者意識が巣くっていた。

「その頃は、不熱心なクリスチャンを心の中で裁いていました」と語る山本さん。行動のすべてが律法的だった。

そして、他者への裁きと自己憐憫が頭の中でぐるぐると回り出し、ついに「この教会には愛がない!」と決めつけた。

教会に行くのをやめ、この世に逆戻りすることも決心。故郷を離れ、東京で暮らすようになった。

東京では、新宿で

路傍伝道をしてきた。淋しさと虚しさで「死にたい」と思った。そしてある日、どうしようもなくなつて神様に泣きを入れた。「神様、俺もう駄目です。自分の力じゃこれ以上、生きていけません。教会に帰ります…」

一緒にナンパをしていた相棒は、罪の意識に苛まれて精神病院への入院を繰り返すようになり、しばらくして自殺した。罪が、ゆるやかに彼を殺したのだ。

罪が赦された

山本さんはその後、「故郷に帰るよいうに」との神の促しを受ける。それに従って地元に戻り、教会で3カ月間寝泊まりしていたとき、さらに強

罪赦された喜びと聖霊の助けによつて

い神の迫りを受けた。それは、自分が犯してきた罪を細かく牧師に言い表しなさい、というものだった。

「今さらそんな必要があるのか？牧師にドン引きされて信頼関係が壊れてしまうんじゃないか？」などの思いもかすめたが、意を決して、肉體関係のことなど、覚えている限りの罪を告白した。

その瞬間、自分がどうしようもない人間で、地獄に行つても仕方がない存在なんだということに初めて気が付いた。自分が犯してきた罪の重さを思い知らされた。それまではどこかで、自分は被害者で悪いのは親や他人だと思つていたので。

それを聞き終えた牧師は、聖書からこう宣言した。

「誰でも自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます！」

この時の感動を言葉にするのは難しいと山本さんは言う。ただはつきりと、罪を赦された実感、救われた実感が押し寄せてきた。同時に、神の力に触れられて、しばらく立てない状態になり、神が自分の内側を新しくし、きよくしてくださっている

のを感じた。

「あの瞬間から僕は伝道者になりました。この救いの喜びをできるだけ多くの人に伝えたい、生きる希望を失っている人たちに神の愛を伝えたい。そう心の底から思つたのです。こんな自分を愛し、救ってくれたキリストは、他の人たちも間違いなく救うことができると思つた。特に若者たちに伝えたいと思つた。

その頃、いわき駅で天理教の人達が堂々と布教活動しているのを見かけた。真の神を知らない彼らでさえ大胆にやっているのだからと、背中を押される気がした。新宿で路傍伝道をしているクリスチャンを見て、「あんな風にはなりたくない」と思つていたのに、自分が受けた神の愛を分かち合いたいと、外に立つようになつた。

今は、目の前を通り過ぎる人たちが、せめて家に帰つた時にでも「駅前で変なイタイ人が神の愛とかを語つてたよ」と話題にでも出してもらえらるなら嬉しい、そう思えるようになってる。

試練の中から

伝道者としての召しを受け、多く

の祝福を受けていた矢先、山本さんは人生の中で最も辛い経験をした。父親が昨年12月、急性心不全で亡くなつたのだ。両親の離婚を体験し、一時は父親を憎みもしたが、クリスチャンになつてからは父を赦し、一緒に礼拝できる日を待ち望んできた。そんな時の、突然の別れだった。



再開した「デリチャ」で福音を語る

父の死のショックで鬱状態になり、誰とも会いたくない心境に陥つた。しかし、山本さんを高校時代に救いに導いた友人や、身近な仲間たちに励まされ、次第に元気を取り戻してきた。何より、路傍伝道で出会つた人々から「もう駅前に来ないの？」との連絡を受け、立ち上がる勇気が

与えられた。そして、当初4月ぐらゐまで休もうと思つていた路傍伝道を、40日ほどの苦しみの期間を経て、再開した。

1月22日、寒風吹きすさぶいわき駅の歩道橋下に立つた。ギターを弾こうとしたが、1曲弾いた段階で寒さで指が動かなくなつた。しかし、iPodにギターのカラオケを入れたものをアンプにつないで賛美。そして、道行く人に福音を語ることに力が与えられ、心はマグマのように燃え上がってきた。いつのまにか鬱的な気分も一掃された。聖霊が助けてくださっている、それを実感した。

山本さんがいつも意識させられている御言葉は、イザヤ書61章だといふ。貧しい者、傷ついた者、悲しむ者たちを優先したいといつも願ひ、愛の実践を心がけている。自分が多くの痛みを体験したことで、そんな痛みを内面に抱える若者たちに共感することができると。

クリスチャンとしても、律法主義から解放され、神の恵みで生きる生き方を見出した。今は弱い自分そのままさらけ出せる。そして、その姿はイタくない。カッコイイのだ。だから若者たちが集まるのだ。

(取材 五十嵐義隆)